

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月9日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530528

研究課題名（和文）

被爆表象のメディア社会学：「被爆の記憶」の伝え方のエスノメソドロジー

研究課題名（英文）

The Media Sociology of A-Bomb Phenomenon: A Ethnomethodology of "Hibaku no kioku"

研究代表者

好井 裕明 (YOSHII HIROAKI)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：60191540

研究成果の概要（和文）：NHK アーカイブスで公開されている被爆を描くドキュメンタリーを20本書き起こした。そのトランスクリプトをもとにして各番組に特徴的な被爆表象を描く「方法(ethnomethods)」を解読するための手がかりを探究した。そのうえで、具体的な被爆の現実や被爆者の人生の意味を被爆問題を考える主体としての一般的な市民カテゴリーに回収させてしまう「方法」など特徴的な「方法」を解読するエスノメソドロジー的論文を執筆した。

研究成果の概要（英文）：I made the data transcripts of Hibaku documentaries opened to the public by NHK archives. And I researched the clues to analyse the ethnomethods of describing Hiroshima image and Hibakusha image. Further I made the ethnomethodological paper on the methods of Hibakusha image that transform the real feelings and meanings of life of Hibakusha into the common moral of general citizens, such as No More Hiroshimas, Anti-nuclear weapons.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：差別・排除、被爆問題

## 1. 研究開始当初の背景

被爆体験の継承は日本が達成すべき重要な課題である。しかし戦後68年を迎え、被爆者の高齢化が進み語り部などによる直接的な被爆体験の語りの継承は今後ますます困難となりつつある。直接的な体験語りが増え、近い将来それが終わることが予想される現在、い

かにして被爆の記憶を継承し新たに語りだすことができるのか。こうした課題は社会学にとっても重要なものといえる。

これまで被爆問題の社会学は、主に被爆者に対する生活史聞き取りを通して被爆体験に固有の苦悩や生のありようを明らかにしてきた。また聞き取りだけ

でなく当事者を対象とした質問紙調査を実施し「原爆体験」の実態や問題点を明らかにした成果もある。また原爆の絵がもつ意味を自己言及的に解説した研究成果もある。

被爆問題の社会学では、常に原爆被害を受けた当事者の語りが最重視されるように、できごととして、事実がどうであったのかということが社会学的な調査研究の中心を占めてきた。もちろんそのことに申請者は異論を唱えるつもりはないが、先にのべた現状を考える時、原爆あるいは被爆をめぐる、その事実や真実が映像や言説をとおして、メディアにおいてどのように描かれ、語られてきたのかを詳細に検討し、その意味や意義を批判的に考察するという新たな社会学的課題が浮上してくるのである。もちろん、すでに映画などメディアにおける被爆表象を分析する成果が海外には存在するが、最近になり日本でも若手や中堅の世代が新たな関心のもとで戦争をめぐる社会学を展開しつつあり、被爆問題のメディア史や被爆を扱う映画や小説などの文化的次元でそれらがどのように受容されてきたのかを明らかにする被爆問題のメディア力学の研究が出され始めている。

ただ、今回申請者が研究目的とするようなドキュメンタリーや映画、アニメーション、さらには新聞言説のなかで被爆者等被爆表象がどのように描かれているのかについてエスノメソドロジイ的発想と手法で個別のかつ詳細にその「方法」を抽出し批判的に考察する作業はまだなされていなかった。

## 2. 研究の目的

本研究では、時代の流れの中で被爆表象や被爆問題がどのようにメディアにおいて描かれそれを私たちが受容してきたのかを分析する従来のメディア研究とは一線を画したうえで、被爆ドキュメンタリーや原爆を扱う一般映画や啓発を目的とするアニメーションにおける映像やナレーション、さらには毎年組まれてきた新聞での被爆問題をめぐる調査報道記事言説をエスノメソドロジイ的に詳細に検討する作業を通して、被爆表象を描くために用いられている「方法(ethnomethods)」を明らかにし、たとえば、いかにして被爆問題やヒロシマ・ナガサキというイメージをめぐる定番で決まり切った意味を付与し、そのイメージを私たちが「あたりまえ」のこととして確認していったのかなど、その方法が私たちの日常的なヒロシマ・ナガサキ

理解や被爆問題への定型的な想像力を維持させるうで行って来た微細な権力とでもいえる力を明らかにしながら、そうした「方法」がもつ特徴や時代的な変遷を論じることを目的とする。

## 3. 研究の方法

- (1) まず入手可能な映画やドキュメンタリーの映像資料をできるかぎり入手した。また平行して被爆問題関連文献を収集し、その内容を読破した。
- (2) そのうえで、映画やドキュメンタリーに関して、個別の作品の中で、映像に対してどのような内容や言葉のナレーションが並置され、その映像の意味を見る側に安定的に伝えようとしているのか、あるいは映画においては、映像の中で被爆者がどのように描かれ、被爆者についてどのように語られているのかをめぐって、個別作品を視聴しながら、確認した。そのうえで、まず被爆ドキュメンタリーの解説作業を本研究期間で一定進めることを決めた。
- (3) 被爆ドキュメンタリーに関しては、本研究以前から、機会あるごとに放送された番組を録画してきていたが、まとまって視聴し、書き起こす必要があった。
- (4) そこで、その作業を実現するために、本研究の目的や意図を説明したうえで、映像の学術利用を目的とする NHK アーカイブ ストライアル第三期に申請し、採択された。半年間という期間内で、川口市にある NHK アーカイブスに集中して通い、公開されているこれまでの被爆ドキュメンタリーの中から、内容的そして時代的な流れを判断して、結果的に 20 本の被爆ドキュメンタリーを選び、その映像やナレーションをそのままに書き起こし、トランスクリプトを作成することができた。
- (5) 他方で、広島へ出かけ、平和記念資料館などで被爆資料を閲覧し、中国新聞や朝日新聞の被爆問題担当記者に会い、原爆問題や反核平和問題を取材してきた体験やそのときに感じていた思いなどを聞き取った。この聞き取りや資料閲覧作業は、本格的なものではなく、映像資料や言

説解読の参考のためと位置付けていた。そしてこの調査の過程で、朝日新聞広島総局に昭和34年から現在までの原爆問題、反核平和問題関連記事のスクラップがあることがわかった。昭和30年代の記事はすでに茶色く酸化しており、支局の記者ですら、ほとんど見ることはなく、放置されていたものであった。しかしこうした言説は本研究にとって極めて意味のある重要なものである。そのために、本研究の目的と意図を説明し、了承を得たうえで、その記事をすべてデジタルカメラで接写し、資料化した。接写した記事で注目すべきは、毎年8月6日にあわせて企画を組み、記者が被爆者や関係者、研究者などを訪ね取材した内容を基にして報道する調査報道の特集である。他にも原爆問題や反核・平和の活動をめぐるできごとを報道する記事が多く残されていた。また、世界の軍縮をめぐる報道などもあり、多彩な内容で、全体で20,000枚を越えるものであった。この新聞記事資料は、ある意味偶然で見出された貴重なものといえ、今回の科研申請期間ですべてを読み解き分析することは困難だと判断した。そのため、本研究期間は被爆ドキュメンタリーのトランスクリプト作成作業とその解読に焦点をあてることにし、継続的な課題を設定し、新たに科研を申請することに決めた。幸い、平成25年度から3年間、本研究のテーマの継続発展を目的とする研究を申請し、すでに採択されている。この新たな研究期間で本研究期間で収集できた映像や言説についてもさらなる解読を進める予定である。

#### 4. 研究成果

被爆ドキュメンタリーに関しては、書き起こした20本の作品すべてを一気に分析することはできないので、被爆、問題を伝える特徴的な「方法」が例示できる2つの作品をとりあげ、エスノメソドロジ的な詳細な解読を試みた。

一つは原爆ドームが世界遺産化されたことにあわせて製作されたドキュメンタリーである。そこでは被爆者運動を

初期中心的に組織化していった人物の半生が映像と共にまとめられており、そこには原爆被害を受けた人間の厳しい怒りや苦悩、当時何の保障もなかった過酷な生活の現状やそれに立ち向かって生きる人生の意味が描かれていた。それに対してドキュメンタリーはその意味を見る側にそれ自体として提示することなく、最終的には個別の人間の苦悩や生きてきた意味を脱色し、より一般的な「市民」というカテゴリーを司会役のアナウンサーが持ち出し、被爆者の体験や苦悩を考えることは反核・平和を考える「市民」の課題だという一般的で通俗的で平板な道徳的イメージへと回収していったのである。

またもう一つの作品では、女性カメラマンが戦争と女性をめぐる自らの問題関心のもとで被爆女性と出会い、彼女たちの現在の姿を写真におさめようとする。しかし、そこには写真を撮るどころか、会って話を聞くことさえもなかなか承諾してくれないという現実があった。被爆女性にはそれぞれに異なる、生きてきた過去があり、その深みにまで、なんとかかいたることができないかぎり、写真にその姿をおさめることは難しいのである。ドキュメンタリーでは、こうした被爆者の心の奥に入ろうとするがなかなかそうはできない女性カメラマンの姿がまとめられている。この作品は先のもとの異質であり、型どおりで決まりきった被爆者イメージを提示することはない。むしろ被爆女性と出会い、彼女たちと繋がることができない困難をドキュメンタリーは描くことで、原爆で被害を受けた女性が、思わずみせてしまうような日常の苦悩の姿が見る側に自然と伝わってくるような個別性の映像があった。こうした2作品の特徴などを解読し、その成果を学会で報告した。

さらに学会報告時の質疑などを受けて、分析を洗練させ、学術論文化した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 好井裕明「被爆を描くドキュメンタリーを解読する——被爆表象の批判的エスノメソドロジの試み——」『社会学論叢』第176号、日本大学社会学会、2013年、47-70頁、査読無。

[学会発表] (計2件)

- ① 好井裕明「被爆を描くドキュメンタリー

を解説する「原爆被害者と『被爆者』」  
日本大学社会学会大会、2012年6月30  
日、日本大学文理学部

- ② 好井裕明「被爆の記憶」の語り方を解説  
する」(テーマセッション「戦争体験の世  
代間継承:被爆の記憶と戦争体験の継承」  
での報告)、第59回関東社会学会大会、  
2011年6月18日、明治大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

好井 裕明 (YOSHII HIROAKI)  
日本大学・文理学部・教授  
研究者番号: 60195140

### (2) 研究分担者

研究者番号:

### (3) 連携研究

研究者番号: